

# 仏教教育による世界の回復

齊藤圓眞

今般、私に課せられましたテーマは「仏教教育を通じての世界の再生」ということです。

このテーマでお話させていただきますのに、先ずはじめに確認しておくべきことは、仏教教育が世界の再生に多大な貢献をしようということです。そしてそれには仏教教育がいつ、どこで、どの様に行われるべきであろうかということの確認が必要です。

我々は寺院での法話や、インターネット、パンフレット、その他の出版物などを通じて仏教教育を行っています。また必要とあればいつでも、仏教系の大学や寺院で研修会、短期集中講座、仏教法会を通じてこれを実施することができます。さらに加えて、必ずしもうまくいっているとは限りませんが、仏教系の保育園・幼稚園・高校・大学などで仏教教育が行われています。

ただ、大学教員であった私自身の経験からすると、大学は学問的な講座だけではなく、実学的な講座、例えば仏教による社会貢献、仏教による世界平和への貢献などといった講座なども同時に設ける必要があるように思われます。

ところで、1981年にローマ教皇パウロⅡ世猥下が日本を訪問された折、日本には偉大な聖人がおり、その聖人は「己を忘れて他を利するは慈悲の極みなり」と言っていると話されたのでした。その偉大な宗教的指導者とは、日本天台宗を開いた最澄のことでした。9世紀の初頭に最澄は学生僧教育のための規則「山家学生式」を制定したのですが、その中で、ローマ教皇が引用された言を用いているのです。これはつまり、人間はどうしても自分の利益をまず第一に考えがちであるが、大切なのは自分の利益を忘れて他人の利益になることをすすんで行うということだ、他を利するという精神こそ最高の慈悲の行為であるということです。

最澄はさらに続けています。

国宝とは何物ぞ、宝とは道心なり。道心あるの人を名づけて国宝という。故に古人いわく、「径寸十枚、これ国宝にあらず。照千一隅、これすなわち国宝なり」と。

最澄はその教育システムによって、このような世の中の宝のような人、すなわち己を忘れて他を利する心を持ち、一隅を照らす人々を育てようと望んだのでした。

このような最澄の教えのもと、我々天台宗の宗徒たちは「一隅を照らす運動」を僧俗一体となって推進してきています。もちろんこの運動の中には多くの講演会などの仏教教育研修も含まれているのですが、私はこの運動そのものが世界回復への仏教教育の一形態として機能していると思うのです。

この「一隅を照らす運動」には次のような三つの主たる実践目標が設けてあります。

- 1) 生命(あらゆる命に感謝しよう)
- 2) 奉仕(布施の精神、無償の理念に基づきありがたいの心で実践しよう)
- 3) 共生(地球に優しい生活をしよう)

そして具体的に次のような実践活動を行っています。

- 1) ユニセフ支援活動

- 2)ドゥアン・プラティープ財団(タイ)支援活動
- 3)パンニャ・メッタ子供の家(インド)支援活動
- 4)ラオス学校建設
- 5)国内被災者救護活動
- 6)教育里親制度
- 7)地球救援募金
- 8)全国一斉托鉢
- 9)写経推進運動
- 10)一隅を照らす日(毎月4日、個人のボランティア活動)

これらに加え、この数ヶ月の内でも、チリ、ハイチ、中国での地震災害に際して救援基金を送り、今月には長期計画のもとで中国モンゴル自治州での植林活動を行っております。

ここで釈尊の少年時代の話にちょっとふれてみたいと思います。

ある日、人々が春を祝い五穀豊穡を神々に祈る農耕祭にシッダールタが出席した時でした。農夫が鋤で大地を掘ったところ、冬眠中だった小さな虫が、春のやわらかな日の光があたる土の上に顔を出したのです。すると小鳥がやってきてその虫をついばみ、空中に飛び上がった時でした。今度は鷹があらわれてその小鳥を口にくわえて飛び去ったのでした。一瞬人々はその光景を見て驚きましたが、同時にそれは当たり前のことだと感じていたのです。ところがシッダールタだけは大きなショックを受けてその場から離れ、一人樹下で瞑想を始めたという話です。

皆さんはこの話をどのように考えるでしょうか？

ひとまずこの話は横に置いておくとして、かつて日本の家庭では食事の前後に行うマナーがありました。こうした大切な家庭における伝統がほとんど忘れられている現状は残念に思いますし、これは復活させるべきであると考えます。これは私たちや子供たちに「少欲知足」というよく知られた仏教の教えを思い起こさせるものです。食事前に人々は合掌して「頂きます」と言い、食後には「ご馳走さまでした」と言ったのです。

今日主要国では、コンビニエンスストアに行けばいつでも容易に食べ物を買うことができます。食物は大量生産、大量消費されるようになっていきます。しかし一方では世界には飢えに直面している多くの人々がいるのです。

食物とはいったいどのようなものなのでしょうか。私たちはどのように考えるべきなのでしょうか。少なくとも私たちは自分の命を維持するために何かを食べなければ生きていけません。ただ、肉であろうが野菜であろうが、それを食べるということは他の命を犠牲にするということになります。そこで先程の「少欲知足」という言葉が思い起こされてきます。この素晴らしい教えは何も食物に限らず他の多くの事にも当てはめて考えることができるのではないのでしょうか。

私は、かつて北アイルランドのベルファストでコーナーストーン・コミュニティーの昼食会に招かれ、その主導役を務めることを要請された時、仏教の食事作法中の短い一節を唱えて食事をしたことがあります。コーナ

ストーン・コミュニティはノーベル平和賞の候補に挙げられたこともある団体で、ベルファストの紛争最前線地区でプロテスタントとカトリックの住民とキリスト教教会が、両教徒間の和解を進めるために組織された団体です。北アイルランドでは、プロテスタント住民とカトリック住民の間で40年間も深刻な暴力とテロが全域で展開されてきています。私は一人の仏教僧として10年近く外側からの協力者としてこの団体の活動を支援してきました。この昼食会はメソヂストの教会で行われ、プロテスタント住民とカトリック住民が席を共にしたのです。そこで私は次のような一節を唱えたのです。

「我いま幸いに仏祖の加護と衆生の恩恵によってこの清き食を受く。つつしんでこの食の来由をたずねて味の濃淡を問わず。いただきます」。

食後、プロテスタント住民もカトリック住民も「何と素晴らしい言葉なのだ。こうした簡単な勤行を行うことを通じて、ここのプロテスタント住民とカトリック住民間の和解だけでなく、あらゆる人々の間の和解も可能になるのではないか」と言ったのです。

どうやら「仏教教育による世界の回復」のための材料は私たちのすぐ手近の日常生活の中にもまた見出せるように思うのです。

# 永明院

日本国 〒616-8385 京都市右京区嵯峨天龍寺芒ノ馬場町 60

## 大乘仏教の禅宗における相互共存

### 歴史的背景

およそ 2560 年前のインドで、釈迦牟尼はブツダガヤの菩提樹の下で瞑想されました。そして、(日本の禅宗の伝統によると)12月8日の朝、明けの明星を目にされた時、完全な悟りを経験されました。仏教とは、その本質において、生きている人々が自分自身の本来の性質を理解し人格の完成を成し遂げるのを手助けする釈迦牟尼・仏陀の教えです。

しかしながら、仏教が中国に伝わった後、亡くなった人のために49日目まで7日毎に追悼会を行うというインド仏教の習慣は、仏教の伝来以前に支配的だった中国の二つの宗教によって大きな影響を受けました。その二つとは、(主に精神的な事柄に関心を持つ)道教と(主に倫理的発展に関心を持つ)儒教です。

道教は、人々はその死後、地底界の10人の王によって裁かれると教えています。死の時から49日目まで毎週行われる7回の追悼会のそれぞれを取り仕切る王が10人の王から一人ずつ指定されました。すると3人の王が残るため、中国では本来は7回だった追悼式に3回の追悼式が加えられました。1回は死後100日目に、2回目は死後1年目に行われ、3回目は死後2年目に行われたのです。後の歴史の中で10人の王は10人の菩薩へと進化し、これらの儀式はより仏教色の濃いものとなりました。

6世紀の半ばに仏教が日本に伝えられた時、仏教は、神道という名で知られる日本に元からあった宗教と接触しました。神道は、太陽や月、水、そして土地といったすべての自然の現われを神とみなすシャーマニズムの系統です。この二つの宗教の接触は初めのうちは対立的なものでしたが、短期間でこの対立は解消され、仏教は国教に指定されました。最初は仏教を信奉するのは主に支配階級に限られていました。

日本に到達した仏教の第一波は、いわゆる奈良仏教の六宗を作り上げました。これら六宗は、仏教の儀式、哲学、そして倫理面に重点を置いていました。これらの宗派のうち三宗は今日も存在しています。まず、唐招提寺を総本山とする律宗(Vinaya)、次に、薬師寺を総本山とする法相宗(Yogachara)、そして、東大寺を総本山とする華嚴宗(Avatamsaka)です。

この時期に、仏教と神道が融合した神仏習合が起こり、そこで神道の神々は仏陀や菩薩の顕現であると見なされました。その結果、仏教の寺が神道の神社の境内に建てられ、また、こちらの方が多いのですが、仏教の寺の境内に神道の神社が建てられました。

9世紀に中国から、仏教の天台宗と真言宗が日本に伝えられました。これらの教義は日本中に広まり、これまでより一層はっきりと日本的な形をとった仏教が形作られました。この仏教の日本化の過程は12世紀、13世紀の間も続き、仏教のいくつかの新しい宗派が生まれて日本人の間にも広く広まりました。これらの宗派の中に、主に支配階級と武士階級に支持された禅宗、法華経に基づき町衆の間に人気があった日蓮宗、そして、浄土思想に基づき農村の人々に人気があった浄土宗、浄土真宗、そして時宗がありました。

亡くなった人々のための追悼法要は、日本でさらなる発展を遂げました。死後7日目に行われる法要に対応して死後7年目の初めに追悼法要が行われるようになりました。13年目の終わりには、2週目の終わりに行われる法要に対応してもう一度法要が加えられました。(14年目ではなく13年目に行われたのは、

日本では4などいくつかの数字は不吉だと考えられたためです。)これに続いて、死後 33 年の初めに追悼法要が行われるようになりましたが、これは、大乘仏教の菩薩の一人である観音菩薩(サンスクリット語で Avalokiteshvara)は 33 の形をとって生きとし生けるものの救済を手助けする、いう信仰に基づいています。中国生まれの 10 回の法要とこれら日本生まれの 3 回の法要を合わせて、全部で 13 回の法要が行われることとなったのですが、その各々が特定の仏陀や菩薩に見守られています。

1600 年から 1868 年まで続いた封建時代、江戸時代の際に、幕府は、すべての家族がどこかの寺に登録することを強制する檀家制度として知られる制度を定めました。この制度の発達に伴って、前述の 13 回の法要にさらに幾つかの追悼法要が付け加えられました。これらの加えられた法要は、17 年目と 23 年目、25 年目、そして 50 年目の初めに行われました。さらに、50 年目の法要の後は 50 年ごとに法要が行われました。

かくして、自分の先祖を追悼するというのが日本の仏教の特徴の一つと成っています。これは、神道の先祖信仰から派生したものと考えられ、日本における仏教と神道の習合が仏教に与えた影響を示しています。

### **禅の精神**

私自身は臨済宗の禅僧です。禅宗の臨済宗では座禅を実践しますが、座禅の最終的な目的は、ブッダガヤの菩提樹の下で釈迦牟尼が達成された大いなる覚醒を、そして、生きとし生けるものはすべて本質的に仏陀であるという悟りを経験すること、あるいは、少しでもその境地に近づくことです。禅は、私達が命を与えられていることに感謝し、他のすべての存在の利となることをしようと努力します。

禅の哲学は宇宙そのものの哲学です。今では、現代物理学のビッグバン理論により、宇宙の源は無である、ということがよく知られています。最初の無から宇宙のインフレーションとして知られているものが起こり、このインフレーションの過程で、宇宙の体積は限りなく高い温度と密度の状態から指数関数的に膨張し、量子のゆらぎの存在によって今私達が知っているような宇宙の構造が生まれました。原初の無は、虚無的な状態ではなく存在と非存在の間の状態でした。この理解することが極めて難しい出来事を本当に理解できる人は最高位の禅師になることができるでしょう。というのも、その人は、存在にも非存在にも等しくなることができ、そして、人間があまねく持っており人間の特徴とも言いえる欲望を根絶することができるでしょうから。

すべての人間は他の人々を意識し、容貌や知性などの資質について自分と他人を比較します。もし、私達が他人のことを考えるのをやめて自分自身の精神を磨くことに集中することができ、生まれたばかりの赤ん坊が持っている、自分と他人の区別がない汚れのない純粹さの状態に戻るならば、それが無の世界です。

### **大乘仏教の精神**

大乘仏教の基本的な精神は、まず自分の力で自分のために悟りを達成し、それからその喜びを周りの人々と分かち合うことです。このようにして感謝の輪が広がり、喜びの社会が自然に形成されます。古代の中国のある禅師が次のように言われています:「禅とは心を意味する一つの名前である。心が禅の本質である。」禅を追求するということはあなた自身の心そのものを追求することです。仏陀の心を持つすべての人は禅の心を持っています。もしも人が、大乘仏教の精神で、瞑想によって純化された心を持って、幸福の連鎖の最初の輪になるならば、これはついには受け入れられて世界中に広まる、と禅は信じています。

これを起こすためには寛容の精神が必要です。もしも仏教徒が、他の仏教徒以外のすべての人は敵であると信じるなら、世界平和は言うまでもなく、地域の安定さえも不可能でしょう。人間として大切なことは、他の人々に対して敬意を持つこと、その人達の人間性、その人達の宗教、そしてその人達の心に対して敬意を持つことです。

日本では多くの人々が、仏教というものは祖先を偲ぶという信仰に過ぎない、と考えています。それゆえ、彼らは仏教の真の本質を見落としています。それは、精神の静穏と人格の完成を達成するための釈迦牟尼の教えなのです。私は、日本で話す機会があればいつでも、仏教は死者のための宗教ではなく今この世界に生きている人々のための宗教なのだ、と強調しています。

仏教は、生きている宗教として、スリランカやタイ、マレーシアなど東南アジアの諸国で実践されています。これらの国々では、仏教の実践が、日常生活の一部として深く根付いています。仏僧達は毎日托鉢に出かけます。人々は僧や尼僧に出会うといつも合掌して挨拶します。

この惑星の上では、大勢の人々が様々な土地に住み様々な宗教を信じて生きています。私達が未来へと進む時、もしも、これらの様々な人々が手を携えなければ地球はどうなるでしょう。平和に至る最速の道は、他の人々が最も深く信じているもの、すなわちその人々が信じている宗教への寛容です。互いに相手の宗教と相手の人間性を受け入れることが共存への唯一の道である、と私は信じています。そして、その道へと進むために必要な最初の一步は、私達が物事を認知する私達自身の方法を変革することなのです。

ありがとうございました。

国友憲紹師

禅宗国際フェロシップ International Fellowship of Zen Buddhist (I.F.Z.B.)、議長